

翻 訳

中国の社会学を論ず

潘 光 旦 著
星 明 訳

〔訳者まえがき〕

この翻訳は潘光旦 (1899-1967) の「談中国的社会学」を全訳したものである⁽¹⁾。この論稿は『潘光旦文集』(北京大学出版会)の全 14 巻の第 5 巻 (1997) の pp.428-432 に所収されている。しかし、最初に発表されたのは、1942 (民国 31) 年、潘が西南連合大学の教授の任にあった時、昆明の『中央日報』の社会欄に「社会和社会学」と題して書かれたものであり⁽²⁾ (後に、『自由之道』(1946)に「談中国的社会学」と改題されて収録された)、中国人民共和国建国の 7 年前の民国期の論述である。

この論稿では、中国の社会学の当時の現状に対する問題点、ひとことでいえば中国の社会学は中国の実際問題を扱っていないという欠点とその背景が述べられており、その欠点が三つあげられている。すなわち、一つは人事問題についての研究を軽視していること、二つは中国社会についての研究を軽視していること、三つは一方的に西洋の理論を中国に当てはめていることである。

潘光旦の生涯については、中国社会学史の研究者の韓明謨が作成したものを大部分引用したが (【資料 2】 潘光旦年譜)、そこにはほとんど触れられていないことがらがある。すなわち、この年譜では「1957 年 58 歳、7 月、誤って「右派」に区分される。……1958 年 59 歳、社会主义学院に入り、学習 (1959 年 3 月まで)」とのみ記載されているにすぎないので、ここで若干補足しておきたい。

実際には、潘光旦は反右派闘争期の 1957 年に呉沢霖 (1898-1990)、黄現璠 (1899-1982)、呉文藻 (1901-1985)、費孝通 (1910-2005) とともに中国人類学、民族学界の著名五大右派の一人とされたし、また文化大革命期には「反动学术权威」とされ、「流氓教授」(ごろつき教授)と罵られた (冤罪が晴れ、名誉回復したのは没後 12 年の 1979 年であった)。当時、自宅の蔵書や原稿も差し押さえられ、書斎と寝室も封鎖され、台所のコンクリートにむしろを敷いて眠り、「牛棚」(文革期に批判対象のひとを軟禁した小屋)に入れられ、批判闘争と労働改造を受けた。また、50 年以上前の 16 歳の

時に学校の運動会の棒高跳びでの骨折が原因で右脚を切断した身体でありながら紅衛兵から夏の炎天下で小板凳（背もたれのない小さく、低い腰掛け）の使用も禁止された状態で、腹這いで運動場の草抜きをさせられ病気となった。病院でも反動権威とされていたために医者からも十分な治療がなされず、かつての学生費孝通（当時、費は57歳で、中央民族学院教授）が学院内にあった潘光旦の自宅に自転車のリヤカーに乗せて、連れて帰り、亡くなったこともしばらく子女に知らされず、といった迫害を受けた⁽³⁾。これらのことからどれほどの迫害が潘光旦の身にふりかかったかは想像を絶する。潘光旦は費孝通の腕のなかで息を引きとった。費孝通は「日夜かたわらにあり、助けることができない、悲惨な境遇で、むなしくてどうしようもない」と嘆いたという⁽⁴⁾。

西洋の社会学、および中国の大学で講義されている社会学は、あまりにも空疎で、実際とかけ離れていて、わたしは平素から不満に思っている。社会学の対象は社会であり、社会は多くのひとの集合であり、ひとのひとの間の関係の総和であり、われわれの身近な問題であるので、その社会を研究する学問も非常に实际的な学問であるべきである。

われわれは重慶に行き、大小の機関がもっとも手をやいている問題は、人事問題であることを発見することができた。われわれは各地へ行って、その地のさまざまな事情や慣習などを観察してもまた、同様の問題を発見した。政治機関が人事問題をもっとも解決困難だと感じているだけではなく、工場のような生産機関、学校のような教育機関、会社のような商業機関といった一般に組織が比較的大きく、使用人が比較的多い場所では人事問題がもっとも解決困難だと感じており、十中八、九、一年中、この問題が起こっている。われわれはこれらの機関の人たちと閑談して、もっとも深刻な印象に至ったのは、かれらが費やしたエネルギーは人事面にあり、しばしば事業面より多いことである。われわれはよく政治の分野で仕事をするひとに話が及ぶと、かれらはただ役職に就いているだけで、仕事をしていないという。つまりかれらは人事への対処をつかさどるだけであり、事業を行なうことには目を向けない、「応付」（善処する）という二文字は、多くの問題を含んでいることはいうまでもない。

人事問題というのは、実際には一つの社会問題であり、かつ一つのもっとも真実の社会問題であり、社会問題の核心であり、社会学が研究すべき最大の対象である。しかし、これまでずっとこれを社会問題とみなすひとはあまりいない、本腰をいれて研究しないのみなおさらである。一般のひとが理解している社会問題は人口問題、家族問題、人種問題、犯罪問題、労働問題、貧困問題などのたぐいである。もしわれわれがざっと分析すれば、これらはただ一部の特殊な社会問題にすぎず、さらには一部の周縁的な社会問題にすぎないということがわかる。それらを特殊なものだといったのは、それらはしばしば一部分の社会の構成員にかかわるだけであり、



潘光旦 (1899—1967)

出典：北京大学社会学系・社会学人類学
研究所，学人傳略「潘光旦」

[http://www.shehui.pku.edu.cn/rwpz/
index.aspx?nodeid=20](http://www.shehui.pku.edu.cn/rwpz/index.aspx?nodeid=20)

なおかつややもすれば非常に特別な一部分であり、ある種の病態の一部にすぎないからである。それらを周辺のものだといったのは、それらはしばしば別の生活現象にかかわり、研究するばあい、必然的に別の学問分野にかかわり、それらは一つや二つにとどまらないからである。たとえば生物学、心理学、経済学、法律学などなどである。要約していうと、これらの社会問題は、ほんとうのところ、われわれの当面の人事問題の下位にある。人事問題は比較的純粋な社会問題であり、かかわっている構成員は年齢、性別、貧富貴賤などなどを問わない、そのうえこれらの構成員はまたいたいかなり健全で

あり、どんな顕著な病的状態もない。それぞれのひとがいるので、もとより問題を引き起こしやすい。また病的状態を問うひとは比較的少ないので、問題が起こったら切実に研究する必要がある。その他の社会問題に比べて、人事の問題は重要であるからである。人事の問題は社会問題の根幹であり、その他のものは枝葉ということができる。したがって数十年来社会学は発達し、その研究する問題は多く、すでに獲得した成果もまた相当なものであるけれども、わたしはどうみてもそれは根本を捨てて、枝葉を追求しているという感じがある、とくに中国社会の立場からみてそうである。これが第一点である。

この第一点の実際とかけ離れていることは自ずから第二点のことをもたらす。われわれが長年来注意してきたのはただ一般社会にすぎず、はなはだしきは西洋社会をもって一般社会とみなして、中国の社会をなおざりにした。動植物の分類学の研究者がわれわれに教えていることは、多くの動植物は西洋にあるだけでなく中国にもある、表面上は一つの種類に属するようにみえるが、しかし根底では非常に大きな違いがありうる、ひとたび研究ではっきりとした後には、もしかしたら分類して、別の種類にせざるをえないかもしれない。自然の動植物でもこのようなのだから、ひとの社会ではなおさらではないか。十数年来、われわれが使ってきた社会学の教科書は西洋のものであるし、あるいは西洋の教科書を用いて編纂したものである、われわれが説明したり、原稿を書いたりする時、引用する資料は西洋のものであり、とりあげた原理は完全に西洋の資料からまとめられたものである。ここ数年、調査の気風が盛んになってからは、統計資料が多くなってきて、もちろん状態は比較的よくなった。しかし、社会現象は平面的なものではない、社会現象にはその来歴があり、そのいきさつがあり、その「然」（そうあること）があるし、またその「そうなるわけ」がある、近ごろの調査活動がみいだすことができたもっとも多くのことはただ然（そうあること）ということだけであり、そうなるわけについては、実際にまだ目を向けるひとはいない。換言すれば、社会を研究するひとはほとんど歴

史に精通していないし、かつ歴史を研究するひとにもまた往々にして社会に精通していない。歴史を研究するのに社会を理解できなくともたいしたことではない、しかし社会を研究するひとが歴史に精通していないと、非常に大きな危険がある、あたかも医者病状だけをみて、発病の原因をつきとめないようなもので、一切の解決案が実際とかけ離れていることも無理はない。今日に至り、大学の社会学部が取りいれている「中国社会学史」の課目は、相変わらずだれも教えることができない、たとえこの課目をどうにかこうにか開設した大学でも、無理に間に合わせたものであり、法律に合わせてやっただけである。

うえのはなしはあまり公平妥当ではないというひとがある。近ごろ、少なくとも二つの学問は、社会現象のいきさつとその理由を理解することを目的としている。一つは考古学であり、もう一つは民族学である。考古学は中国の社会現象のはじまりについて、すでに次第にみだしているし、民族学は苗夷（中国古代の南方、東部の各民族の総称）文化を研究し、この方面に次第に貢献している、というのも苗夷文化のなかの一部分は、中国の古い時代にもともとあったもので、いまではすでに過去のものになったものがあるからである、研究でわかった後に、中国社会史の一部の材料にすることができる。「礼失爾求諸野」⁽⁵⁾（礼を失いこれを野に求む）と先人という。もしわれわれが礼を文化の代名詞とみなすことができるならば、そのさき、たくさんのものをみだすことができる。この話はそのとおりである。考古学と民族学の研究資料は、ますますもって多くなるはずで、われわれは比較的整った中国社会史を書くには、どうしてもそれらが続々と発見する資料に頼らなければならない。しかし、われわれはこの二つの学問が提供できるものは、せいぜい社会史のなかの非常に小さな一部分すぎないこと、多くとも十分の一、二足らずを占めるにすぎず、その他の十分の八、九はやはり二、三千年来の文献のなかから、さらには成文になっていない民間の風習のなかから探さなければならない。その部分こそ、現在は一番欠けていることを意識しなければならない。書かれたものを信じることよりもむしろ書かれたものがないほうがよいということばは正しいけれども、過去の文献に対してあまりに疑って、すべてに根拠がなく、無茶苦茶だと考えるのは中国の学問を研究するひとのあべき態度ではない。考古学者のいうところでは、『周官・考工記』の内容は、結局はどの程度まで信じることができるか、もともとわからなかったが、しかし後に発掘の結果、多くの実在する制作物を探しだした。たとえば、殉葬用の車は『記』のなかで描写しているさまざまな例を証明し、正しいものが多くある。もともとの文献のなかに確かなものが多く、たくさんのものは相当確かなものがあったということがわかってきたので、次にはわれわれがどのように選択し、巧みに考証するかということである。もし一切の学問が全部実物に拠るならば、それではまだわれわれはどれほどの学問をやることができるのか。いわんや社会の現象は、とくに人倫関係のなかの比較的主要な部分は非常に抽象的であり、土のなかから絶対に掘りだすことができない。近代の中国社会学界が本国の文献をなおざりにし、本国の社会の由来、変遷に注意を払わなかったことは、わたしが空疎であり、実際とかけ離れていると思わざるをえない第

二点である。

この第二点はまた第三点をもたらしした。すなわち、一方で中国の社会資料は不十分であるし、あるいはたとえ十分であってもまだ大量の蒐集と詳細な整理をしていない、そして一方ですでに歴史哲学あるいは社会史観を展開するひとがあるが、社会史はまだ確立していないから、いわゆる史観はどこからきているのかわからない。この史観が存在していることは事実である。その来源は二つあり、一つは主観的な架空の構造であり、いうまでもなく空虚かつ実際とかけ離れているものである。もう一つは西洋の見解をそのまま踏襲することである。西洋でこの100年来、経済史観、あるいは唯物史観と呼ばれる歴史哲学が流行している。そこから、その見解をそのまま踏襲するひとは、われわれの中国は同じく歴史があり、経済現象もあり、中国人は同じく飯を食べ、同じく食をもって天とするから、経済史観がもし西洋に適用するならば、当然中国にも適用できると思い、そこでただ食料や物品類の資料だけをちょっと整えて、そのなかの一部分を選択して、そのうえに既成の公式の理論を当てはめて、加えたことによって、どこから読みはじめたかわからない二十四史を支える綱領をつくった。このようなひとが根本的に思い至らないのは、このような史観は、たとえその史料がすでに相当整理された西洋の社会にとっても必ずしも適用できるわけではない、多くとも一部に適用されるものである。もしまだ社会史料の整理がすんでいない中国にもってくれば、偏っているうえに、また内容が貧弱ではなからうか。社会現象を本当に研究する立場からみれば、この二つの誤りはいずれもぜったいあってはならないし、避けなければならないものである。

中国の社会学に三つの欠点があることには、主要な原因がある。この原因も西洋の社会学の踏襲からきているものである。この欠点は「同じところをみて、異なったところはみない」ということができる。社会は本来非常に漠然としたものであり、われわれは二言目には社会の構成員に触れている。それを生物学の細胞、化学の分子、物理学の原子や電子にたとえて、構成員を細胞や分子などおなじものであると認めることと等しいのではないか。もし社会の構成員がすべて同じであるならば、上述の第一点のなかで話した人事問題は起こるはずがなく、たとえ発生してもわれわれにはみえない。石鹼工場でつくられる石鹼は、一個一個同じであり、われわれはこれまで石鹼が喧嘩できると聞いたことがない。しかし、ひとは石鹼ではない、まったく似た二人は一人としていない。人事問題というのは個々の人びとの「流品」^⑥(品格)の違いから生じる。しかし、この個々の違いに目を向けた社会学者は少ない。このテーマに目を向けたのは社会学者ではなく、心理学者である。いわゆる社会心理学者までも、この部分の社会現象を非常になおざりにしている。社会は漠然としたものであるから、古今東西の社会は基本的にはいくつかの原理の範囲にあり、西洋社会に適用できるいくつかの原理はたいてい中国にも適用できる。現在のことに適用するものは、たいてい過去にも適用できる、したがって事実上特別に中国社会を研究する必要がない、さらに特別に中国の歴史的社會を研究する必要がないかもしれないと考えるひとがいる。これも、また明らかに同じところをみて、異なったと

ころをみないという考えに陥っている。要するに、第一の欠点はひととひとの間の異なりを十分みないからであり、第二の欠点は各社会間の、あるいは各集団間の違いをみないからであり、第三の欠点は各歴史的な社会間の違いをみないからである。このいくつかの空疎かつ実際にそぐわない欠点を取り除き、それによって中国の社会生活に利用できる社会学を築くには、当面の急務はわれわれが同異を弁別する目を高めることである。

〔注〕

- (1) 訳者はこれまでに、次の訳稿で潘光旦のひとと学問について紹介したことがある。励天予著・星明訳、2013年3月、「新思想の伝播者潘光旦のひとと学問－著名学者潘光旦の生誕100年を記念して－」（『社会学部論集』、第56号、佛教大学社会学部、pp.131-145および李劍華著・星明訳、2017年9月、「社会学覚書」（『社会学部論集』、第65号、佛教大学社会学部、pp.63-82、とくにpp.68-69およびp.78を参照されたい。
- (2) 潘乃谷、2000年、「読潘光旦『談中国社会学』の体会」（潘光旦の「中国の社会学を論ず」を読んだ感想）、陳理・郭衛平・王慶仁主編、2000年、『潘光旦先生百年誕辰紀念文集』、中央民族大学出版社、p.290。
- (3) これらの事実については、陳理・郭衛平・王慶仁編、2000年、同上を参照されたい。なお、それらの一部については、励天予著・星明訳、2013年、前掲を参照されたい。
- (4) 北京大学社会学系・社会学人類学研究所、系史・学人傳略「潘光旦」、<http://www.shehui.pku.edu.cn/second/index.aspx?nodeid=20&page=ContentPage&contentid=365>。
- (5) 「礼失而求野」は、漢書芸文志にみえる孔子のことばである。現代の漢語では、「禮有散失則求之於民間鄙野之人」とあらわれ、その訳は本文の他にも、「伝統が中心部で変化し失われ、伝播した周縁部に残る」「礼失ふとも野に求めよ」「礼失ひて（失はれて）野に求む」「礼が散逸したならば、それを田舎の習俗に求めよ」などがある（漢典<http://www.zdic.net>の「礼失而求野」<http://www.zdic.net/c/c/9a/176590.htm> 他参照）。
- (6) 馬戎は潘光旦のいう「流品」について次のように説明している。「潘先生は中国の伝統のなかの『倫』の概念を論じた時、ひとの『流品』に言及した。これは実際にはひとの文化的素養と精神的な品格が達成したレベルを指しており、個人が獲得した技能、才能、財産および社会的地位とは直接関係のない別の評価基準である」（馬戎、「潘光旦及其后人——我所認識的北大入」、<http://wemedia.ifeng.com/58777535/wemedia.shtml>）。
- (7) ジョージ・C・マーシャル（1880 - 1959）はアメリカの陸軍軍人、政治家。1945年12月、アメリカ第33代大統領トルーマンによって、中国における全權特使に任命された（約3年間中国に滞在）し、国民党と共産党の和解に尽力し、両党の連立政府の樹立を企図した。マーシャル・プランの立案・実行により、1953年にはノーベル平和賞を受賞。事実関係のみフリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』（<https://ja.wikipedia.org/wiki/ジョージ・マーシャル>）から抜粋した。

〔謝辞〕

この翻訳にあたっては、本学の張萍教授および元中国社会科学院博士指導教授の張琢教授からご指導や指摘をいただいた。記して、感謝申しあげます。

【資料1】 潘光旦主要著作目録 (訳書を含む)

馮小青	新月書店	1927年9月初版
		1929年8月再版
中国之家庭問題	新月書店	1928年3月初版
	商務印書館	1934年4月再版
優生概論 (人文生物学論叢第一輯)	新月書店	1928年10月初版
	商務印書館	1946年1月再版
日本德意志民族性之比較的研究	新月書店	1930年4月
読書問題	新月書店	1930年11月初版
Henry Havelock Ellis: 性的教育 (訳)	青年協會書局	1934年8月
Henry Havelock Ellis: 性的道德 (訳)	青年協會書局	1934年9月
近代蘇州の人材『社会科学』第1巻第1期単行本		1935年
人文史観 (人文生物学論叢第二輯)	商務印書館	1937年5月
民族特性與民族衛生 (人文生物学論叢第三輯)	商務印書館	1937年7月
明清兩代嘉興の望族	商務印書館	1947年12月
家譜新論 (原稿散逸・論文数編あり)		1937年作
中国怜人 (役者) 血縁研究	商務印書館	1941年9月初版
	商務印書館	1941年9月重印
優生與抗戰 (人文生物学論叢第七輯)	商務印書館	1944年3月重慶初版
Thomas Henry Huxley: 自由教育論 (訳)	商務印書館	1946年3月重慶初版
Henry Havelock Ellis: 性心理学 (訳)	商務印書館	1946年4月重慶初版
	三聯書店	1987年7月重印
自由之道	商務印書館	1946年9月
政学罪言	觀察社	1948年4月
優生原理 (訳編)	觀察社	1949年4月初版
	天津人民出版社	1981年11月重印版
F. エンゲルス: 家庭, 私産與国家的起源 (訳)		1951年訳注, 1964年原稿を 校正するが未出版
蘇南土地改革訪問記 (全慰天との共著)	三聯書店	1952年8月
浙贛兩省畬民訪問報告 (散逸)		1957年作
從徐戎到畬族 (散逸)		1961年以前作
中国境内猶太 (ユダヤ) 人的若干歷史問題—開封的中国猶太人	北京大学出版社	1983年3月第1版
C.R. ダーウィン: 人類的由来 (胡寿文との共訳)	商務印書館	1986年5月 (世界学術名著 叢書)
鉄螺山房詩草	群言出版社	1992年1月
潘光旦民族研究文集	民族出版社	1995年4月
潘光旦文集 (1~14巻)	北京大学出版社	2000年12月

出典: 韓明謨, 2005年, 『中国社会学名家』, 天津人民出版社, pp.234-235, 陳理・郭衛平・王慶仁主編, 前掲, 中国国家図書館・中国国家数字図書館 (<http://www.nlc.cn/index.htm>) および上海図書館・上海科学技術情報研究所 (<http://www.library.sh.cn/>) の所蔵図書リストなどをもとに, 訳者が作成した。

【資料2】 潘光旦年譜

潘光旦，字は仲昂。中国の社会学者，優生学者，民族学者，教育者である。1899年8月13日生まれ，1967年6月10日逝去，享年68歳（満67歳）。

1899年8月13日 江蘇省宝山区羅店镇（現・上海市）の知識人の家庭に生まれる。父・潘鴻鼎は清の光緒24年戊戌科二甲の合格者13名の進士の一人であり，かつて翰林院の編纂記録職を務めた。

1905年 6歳，羅店鎮の私塾で学ぶ。

1906年 7歳，上海大東門内火神廟のある小学校で学ぶ（すなわち「養正学堂」か）。

1907年 8歳，宝山区羅店镇・羅陽初等学堂で修学し，1912年冬13歳で卒業。

1911年 12歳，「嚴光不仕光武論」文を書く（散逸）。

1913年 14歳，清華学堂に入学し，学ぶ。1922年（23歳）卒業。

1914年 15歳，清華で「雜記」二件を発表し，「清華週刊」に掲載する。署名は潘光宣。

1915年 16歳，運動会に参加し，右の足を負傷し体が不自由になった（右大腿部から下部を切断）。

1915年，1916年と2年間休学し，入院および自宅療養を行なう。

1918年 19歳，『清華周刊』にエッセイや翻訳文を多数発表。

1919年 20歳，『清華學報』にエッセイや翻訳文が多数発表されている。

1920年 21歳，多くの短文が『清華周刊』に発表されている。

1921年 22歳，同上。

1922年 23歳，『馮小青考』を書く。2年後，『婦女雜誌』第10巻第11号（1924年11月1日）に掲載される。アメリカに留学し，ニューハンプシャー州ハノーバーのダートマス大学に編入学し，生物学を学ぶ。アメリカ優秀学生連合に参加する。

兄の潘光喬は上海で商工業に従事。弟の光迥は清華を卒業。

妻・趙瑞雲，江蘇嘉定のひと，1898年生まれ。江蘇省立女子蚕業学校卒業，かつて蚕業教育の仕事に6年間従事。結婚後は，家事を切り盛りする。1958年病死。4人の娘，乃穗，乃穆，乃和，乃谷はそれぞれ生物学，歴史，軍医，農業機械を学ぶ。4人とも共産黨員。韓明謨は，潘光旦の4人の子女についてうえのように記しているが，二女潘乃穆は1982年に北京大学社会学部が正式に成立した時，学部副学部長であったし（学部長は袁方，www.Shehui.pku.edu.cnの「北大社会学系之歴史沿革」参照），四女潘乃谷は1988年，北京大学社会学部・社会学人類学研究所の所長であった（喬健，2000年，「記“潘光旦紀念講座”之籌并追念潘光迥」，陳理・郭衛平・王慶仁主編，前掲，p.25）。

1923年 24歳，『優生と中国－背景の初歩的調査－』を書く。アメリカの *Eugenical News* の8巻11期に掲載される。夏，ニューヨークの優生学記念館の優生従事者夏期訓練に参加し，学習する。1924年，1925年の夏，いずれも当館で人類学，優生学の研究を行なう。

1924年 25歳，ダートマス大学卒業，学士号を取得。アメリカ優生学研究会に加入。

8月『東方雜誌』第21巻第22号（11月24日）に「中国の優生問題」を発表。周建人が「中国の優生問題を読む」を発表し，批判意見を提出する。

夏休みの期間に，聞一多らが組織した「大江学会」に参加し，国家主義を鼓吹し，「国内的には改革運動を実行し，外国に対しては列強の侵略に反対する」。

1925年 26歳，ニューヨークのコロンビア大学大学院に入学。

中国の留学生が孫中山先生の追悼会を行なうための「中山遺言状」を英文に翻訳した。また，友人と「国民党第一回全国代表大会宣言」共訳し，『留学生月報』に掲載した。

1926年 27歳，この年の『留学生季刊』の代理総編集を担当する。夏，コロンビア大学大学院を修了し，修士号を取得。また，マサチューセッツ州の海浜生物学研究所で単細胞生物学を学ぶ。8月，帰国し，上海呉淞国立政治大学の教授兼教務部長（1年間）に就く。

1927年 28歳，5月1日，『時事新報・学灯』の編集を担当する。『学灯』に揭示し，中国の家族問題に

ついて意見を募り、のちにそれらを分析して発表した。

この年の8月から1924年まで、前後して上海光華大学、大夏大学、暨南大学、東呉大学法科、復旦大学、滬江大学で授業を行なった(兼任を含む)。また、聞一多、梁実秋、徐志摩、饒孟侃、葉公超、胡適らと共同で「新月書店」を経営した。

9月、『小青之分析』を新月書店から出版、再版は『馮小青』と改名。

1928年 29歳、3月、新月書店から『中国之家庭問題』を出版。1929年4月再版、1931年第3版は商務印書館から出版。

3月、聞一多らと『新月』(月刊)を創刊する。ここから、文壇では“新月派”と呼ばれる。10月、新月書店から『人文生物学論叢』第一編を出版。再版時は、『優生概論』と改名。

1929年 30歳、

10月、東南社会学会の『社会学刊』第1巻第2期に「優生と文化—孫本文先生との討論—」を發表。

12月、『自然淘汰と中華民族性』を新月書店から出版。

1930年 31歳、光華大学文学学院院长ならびに教科担当に1931年まで就く。家譜学などの課程を開設する。

11月、中国社会学社の第1回年会に参加し、「家譜と宗法」を發表する。呉淞中国公学大学部社会科学院院長に就く。

1931年 32歳、『中国評論周報』に多くの文章を發表する。

1932年 33歳、4月、『華年』(週刊)の編集長になる。

1933年 34歳、『華年』(週刊)の編集を継続。

1934年 35歳、

4月、「小青考証補録(上編)」を發表し、『人間世』第2期に掲載。下編は『人間世』第3期に掲載。

9月、H. エリスの「性的道德」を翻訳し、上海の青年協會書局から出版。9月1日から母校の清華大学社会学部の招きに応じて教授に就く(1952年10月まで)。社会思想史、家族問題、優生学などの授業をもつ。

9月、『宗教と優生』を青年書局から出版。

1935年 36歳、「書『馮小青全集』后」文、『人間世』29期、30期に掲載。

1936年 37歳、1月、「陳通夫先生の『人口問題』を紹介する」を發表、『北京晨報』に掲載。2月、清華大学教務長に就く(1946年7月まで)。

1937年 38歳、9月16日、北京を離れて南下。28日、長沙臨時大学教授に就く、入学手続き係りの主任を兼務。

1938年 39歳、西南連合大学教授に就く(1946年7月まで)、教務長(1938年7月まで)、清華大学図書館主任を兼務(1946年まで)。

1939年 40歳、8月、清華大学秘書長を兼務(1941年7月まで)。

1940年 41歳、『今日評論』に多数の論文を發表。

1941年 42歳、秋、中国民主同盟に加入し、第1回、第2回中央常任委員、第3回委員に就く。

1942年 43歳、『雲南日報』、『中央日報』に多数の論文を發表。

1943年 44歳、李根源の招請に応じて雲南大理の第11集团軍幹部訓練班で「抗戰建国と中華民族」の講演を行なう。

西南連合大学時代および清華大学に戻ってから、優生学、家族問題などの課程以外にも西洋社会思想史、中国儒家社会思想史、人材論などの課程を順次設けた。

1944年 45歳、「知識青年の兵役を激励する」を發表し、『自由論壇』増刊第7期に掲載。11月、民盟雲南を創立し、機関刊行物『民主週刊』を發刊。潘が社長に就き、編集者の一人となる。11月、重慶で5大学社会学部の招きにこたえて「社会学者と中国社会」の討論会を主催。

1945年 46歳、7月、西南連合大学の教務長を兼務(1946年7月まで)。12月1日、昆明で内戦に反対する民主「一二・一」運動が勃発し、4名の青年がスパイに惨殺される。潘や聞一多らは終始学生側にたち、

討論会に参加し、声明を発表した。

1946年 47歳、

夏、『鉄螺山房詩草』を脱稿。

1月13日、聞一多、費孝通、呉晗と連名で、「マーシャル将軍⁽⁷⁾への四教授の書簡」を発表し、国民党政府の独裁的反動の本質を憤って指摘した。6月、民盟雲南支部を代表し、3回にわたり座談会を開き、民盟は内戦に反対であること、平和を要求すること、独裁に反対であること、民主的なしっかりした立場と主張を要求することを表明した。

7月14日、殺害された李公樸のために弔辞を書く。

8月9日、蘇州へ。

10月、清華大学に戻るとともに、図書館主任を兼職（1952年まで）。（1946年夏－秋、国民党のスパイが李公樸、聞一多を殺害した時、スパイは潘光旦およびその他の民主的な進歩人も殺害すると高言を吐いたので、潘と費孝通らは一時的に昆明のアメリカ領事館に避難した。（陳理、2000年、潘光旦先生簡介，陳理・郭衛平・王慶仁主編、『潘光旦先生百年誕辰紀念文集』，中央民族大学出版社，P.23）。

1947年 48歳，8月，ユネスコ中国委員会委員に推薦され，南京での成立大会に出席。

1948年 49歳，清華大学は地下党と国民党反動派の闘争なかで，12月15日に解放を迎えた。潘は共産党の保護のもとで欣然として解放軍を迎えた。

1949年 50歳，10月1日，建国パレードに参加。10月，中央人民政府政務院文化教育委員会委員に就く。中国人民政治協商会議第2回，第3回，第4回全国委員会委員など就く。

1950年 51歳，『光明日報』，『文匯報』に多くの時事論文を発表。

1951年 52歳，蘇南へ行き，土地改革の実地調査を行なう。全慰天と共同で「誰説“江南無封建”？」などの論文を発表する。

1952年 53歳，11月，中央民族学院教授に就く（1967年逝去まで）。

1953年 54歳，『開封的中国猶太人』を中央民族学院から謄写版印刷本として出版。

1954年 55歳，中国人民政治協商会議第2回全国委員会委員に就く。

1955年 56歳，「湘西北“土家”と古代巴人」を発表。

1956年 57歳，6月，湘西北土家地区を訪問。

1957年 58歳，7月，誤って「右派」に区分される。

1958年 59歳，社会主義学院に入り，学習（1959年3月まで）。

1959年 60歳，第3回中国人民政治協商会議委員に就く。10月から1964年まで『辞海』編集の仕事に携わる。

この年から1962年まで，中・印，中・パキスタン国境問題の資料の翻訳に従事する。

1960年 61歳，1959年の各項の仕事を継続。

1961年 62歳，「從徐戎到畬族」と題する民族学の論文を書く。

1962年 63歳，『資治通鑑』の少数民族資料に圈点を付ける仕事を行なう。

1963年 64歳，『史記』のなかの民族資料に圈点を付けたり，500枚のカードを登録する仕事に従事。

1964年 65歳，『春秋左伝』，『国語』，『戦国策』，『竹書紀年』，『逸周書』，『世本』などの民族資料に圈点を付けたり，500枚のカードを登録する仕事に従事。

1965年 66歳，清華大学大学史作成班の取材を受け，郭道暉が「談留美生活」の記録をまとめる。

1966年 67歳，ダーウィンの『人類の由来』の翻訳を仕上げる。

1966年 文化大革命が勃発し，潘光旦は苦しい立場に追い込まれ。「反動學術權威」の札が掛けられ，書斎と寝室は封鎖され，台所のセメントのうえにじかに寝た（胡起望，2000年，「嚴謹治 勤奮求索—深切懷念潘光旦教授」，陳理・郭衛平・王慶仁主編，前掲，p.81）。

1967年 68歳，

5月13日，危篤に陥り，積水潭病院に入院。

6 月 1 日、中央民族学院内の自宅に戻り、

6 月 10 日逝去、享年 68 歳 (満 67 歳)。

1979 年 没後 12 年を経て、冤罪が晴れて名誉回復。

1980 年 6 月 没後 13 年、中央民族学院および中国民主同盟中央が追悼会を举行 (潘乃穆, 2000 年, 「回憶父親潘光旦先生」, 陳理・郭衛平・王慶仁主編, 前掲, p.133)。

出典: 韓明謨, 2005 年, 『中国社会学名家』, 天津人民出版社, pp.322 - 330 および陳理・郭衛平・王慶仁主編, 前掲などをもとに訳者が作成した。

(ほし あきら 元現代社会学科教員)

2019 年 4 月 22 日受理

